

論文の内容の要旨

論文題目 清代中国の地域支配

氏 名 山本英史

本研究は、これまでの清代中国の〈国家と社会〉についての理解が中国特有の史料のあり方に大きく規定されたものであったことを鑑み、そのような史料が有する独特に屈曲した覗き窓から〈国家と社会〉を垣間見る難しさを熟知した上でなおかつそこに見られる「虚像」に「実像」を見出そうとした一つの試みである。

清代史料と付き合うに当たっては次の三点を留意すべきである。第一は、その「当為と実態」の仕組みをいかに会得するかという問題である。そのためには史料の発信する情報がいかなる「当為」の反映であるかを見極め、そこからどういった「実態」が掘り起こされるかを常に意識しなければならない。第二は、清朝の中国支配が確立する十八世紀前半までの百年余りの時期の特性をいかに考慮するかという問題である。清朝統治下の厳しい言論統制の中で著された史料をどう読み解くかは清初史の明末史とは異なる難しさである。第三は、州県よりもさらに基層にある郷村地域の支配実態をいかに復元するかという問題である。それには一次史料の質と量との両方からの開拓がなお必要であり、その成否が大きな影響を与えられとされる。

それゆえ本研究ではこれらの留意点を強く意識し、それらを踏まえた上で清代中国の地域支配の実態を《徴税機構の再編》《清朝と在地勢力》《郷村管理と地方文献》の三つの方向から考察した。内容は次の通りである。

第一篇《徴税機構の再編》では、清朝の徴税機構が里甲制の解体に伴い、事実上、税糧包攬と呼ばれる請負慣行によって維持されるようになったことを実証し、徴税機構という王朝支配の根幹に関わる制度を通して清朝の地域支配の構造を明らかにした。第一章〈税糧包攬の展開〉では、税糧包攬の行為が十六―十七世紀の里甲制に基づく徭役による徴税機構の残存期からその後の

消滅期にかけてさらに一層の展開を示し、十八世紀においては事実上の新たな徴税機構として機能するに至った過程を跡づけた。第二章〈自封投櫃制の構造〉では、清朝が里甲制による徴税に代わる制度として提唱した自封投櫃の制度的構造を分析し、自封投櫃制と税糧包攬とが互いに矛盾することなく清朝の徴税機構を形成したことを明らかにした。第三章〈紳衿による税糧包攬と清朝国家〉では、税糧包攬の主要な担い手である紳衿と呼ばれる在地勢力の徴税請負行為に焦点をあて、その特徴を挙げるとともに清朝の対応のあり方について論じた。第四章〈黄六鴻の編審論〉は一地方官が書き残した賦役論をもとに徭役に重きを置く北方地域の賦役制度の構造と税糧包攬との関係を指摘し、併せて田賦に重きを置く南方地域との制度的な相違について言及した。

第二篇《清朝と在地勢力》では、清朝が江蘇・浙江の各地域にその支配を確立する過程において、いかにしてその地域の在地勢力に対応したかという問題を追究し、清初における〈国家と社会〉の関係を地域支配の面から考察した。そして王朝国家の「独裁政治」を地域において実現しなければならなかった地方行政官たちは、そのためには在地勢力と妥協しその協力を求めなければならないという矛盾があったことを明らかにした。第五章〈清朝の江南統治と在地勢力〉では、清朝が江南統治を開始した時期の政治過程をたどり、その地域における在地勢力と地方官僚の対応のあり方を、档案、奏議、公牘、筆記といった系統の異なる諸史料から多角的に分析した。第六章〈康熙年間の浙江在地勢力〉では、康熙年間を中心に浙江において地方官僚から「豪」や「蠹」と目されていた在地勢力の実態を主として公牘を用いて解明した。第七章〈雍正紳衿抗糧処分考〉では、雍正年間、江蘇の紳衿を中心とする在地勢力の税糧未納行為に対して清朝がいかなる規制を実施しえたかという課題を探求し、それを通して清朝の国家体制のあり方を明らかにした。第八章〈浙江観風整俗使の設置について〉では、浙江観風整俗使というポストが雍正年間に設置された背景を、雍正政治のいわゆる「独裁支配」における原則と、その原則が末端において適用される地方行政の実情との関連において再検討した。

第三篇《郷村管理と地方文献》では、清代における郷村基層地域とその支配実態についての復元をめざし、地方文献のそれぞれの特徴を指摘した。第九章〈地方志の編纂と地域社会〉では、地方志の地方文献としての有用性とその史料としての限界性を明らかにした。第一〇章〈郷村組織再編の一過程—蘇州呉江・震沢の場合を例にして—〉では、里甲制解体後の郷村組織の再編成の過程を呉江・震沢という特定の地域において検証し、併せて地方志の描く制度史のあり方について言及した。第十一章〈郷村組織と地方文献—蘇州洞庭山の郷村役を例にして—〉では、地方档案をはじめとする地方文献を用いて里甲制解体後の郷村役の特定地域における実態の再構成を試み、併せて地方文献の史料的価値を検討した。第一二章〈浙江天台県の図頭について〉では、

群が極めて有用であると認識するに至った。本研究はその成果を豊富に採り入れ、新史料の利用の意義についても明らかにした。

第三は、文献には示されることが少ない郷村基層地域とその支配のあり方について多少なりとも復元し、その実像の一部を明らかにしえたことである。既知の文献史料では十分な情報を持ちえず、かといってフィールドワークによる聴き取り調査では類推はできても実証しえない清代前期のこうした対象の研究空白を「地方文献」をもってわずかながらも埋めることのできた意義は大きいと思っている。この結果、従来官撰史料からは負のイメージでしか捉えられてこなかった郷村役の概念をいくぶんかは実態に近づけることができたのではないかと考える。

以上の三点はいずれもみな今後の中国史研究が克復しなければならない特有で、かつ重要な課題であり、本研究はその一端を示したにすぎない。